

清水恵さん、さようなら！

小山内 道子

清水恵さんは色とりどりの花に埋もれて十字架の浮き彫りのある白いお棺に眠っていた。安らかな白い透明なお顔は小さく、お人形のように見える。そっと手を触れるとひんやりと冷たい。「恵さん！」と声をかけても、答えることはない。生命はもう彼方へと去ってしまったのだろう。起こってしまったことに現実感はないけど、何とか最後に清水さんにお会いできてよかったと思う。これから永久に失われてしまう亡骸にせめて「さようなら」を云うことができたから。

手を合わせてから、一緒に伺った倉田有佳さん、吉田和子さんとともにご主人の正司さんからお話をうかがった。途中からは恵さんの親友、大道敏子さんも加わった。

清水さんがかなり中心的に準備した函館日口交流史研究会設立 10 周年記念の大会が終わって一段落した一昨年の暮れ、恵さんの体調不良がかなりひどくなって病院を訪れたが、詳しい検査は年明けに行われた。その結果、いきなりかなり進行した大腸がんを宣告された。ご主人は大体あと 3 ヶ月位と告げられたそうである。その衝撃は想像を絶するものだったろう。正司さんはともに闘病するためにすぐに休職し、3 月～5 月と有名な名古屋の病院や埼玉のホスピスを訪れた。

6 月頃にはある程度気持ちが落ち着いて、正司さんと、高校時代からの無二の親友大道さんの実質的な援助を得て、かかえているテーマで論文 2 本とエッセイを 3 本仕上げたのである。大道さんは東京在住なのに、仕事の合間をみて月に 2、3 度も通ってくださったのである。この作業は夫の愛情と敏子さんの友情の確かさを実感させたはずである。恵さんはその喜びの中の仕事によってむしろ力を与えられ、深刻な病気のことをしばし忘れさせる効果があったようだと正司さんはおっしゃった。

私が恵さんからお電話をいただいたのは 6 月半ばだった。いきなり「末期がん」であることを告白されたのである。私は言葉を失った。入院のことは聞いていたものの以前からの婦人科関係の病気が長引いているのだと思っていたから。私はいつか会いに行きたいと答えたが、車で 7 時間かけて伺っても、どのようにお話をすすめるかを考えあぐねて途方にくれた。このような経験は今までにないことだった。長いお手紙を差し上げたが、函館行きは延び延びになっていた。

9 月に入ると恵さんにはさすがに衰えが見え始めた。時々「五島軒」や「モーリエ」のお料理をなつかしんで取り寄せることもあった。それがせめてもの楽しみになることを喜んだ反面、食べる量がほんの少量だとしても、滋養のある食物はがん細胞を活性化させるのではないかと、正司さんは矛盾する恐れを抱いた。私は 9 月の半ば過ぎにもお電話をいただいた。恵さんは「リュボーフィ・シュウエツさんに聞く」を書いておられるので、合宿研究会がシュウエツさんの故郷長崎で開催された折、絵葉書を差し上げたことを喜んでのお礼だった。心なしか弱々しいお声になっていて、胸がいたんだ。

あるときはがん細胞というのは幻であり、非現実と思えることもあったが、内奥では着実に増殖していたことになる。10 月、痛みがひどくなりモルヒネの効果も長続きしなくなって、さらに強い薬を使うことになった。そして、一時的にその痛みが和らいだ安らぎのうちに 2004 年 10 月 15 日午後 9 時 50 分、清水恵さんの生命の営みは終わってしまった。

清水恵さんは北大文学部を卒業して函館市役所に就職し、青少年保養所部局で3年間働いた後、優秀さを買われて市史編さん室に迎えられ、以来20年にわたって着実に仕事をし、数多くの論文を書いてきた。そして今、すべてに通ずる中堅として重きをなし、収集した膨大な資料を駆使して更に大作に挑もうとしていた矢先だった。

人間の生命の長さを決める要因を私たちは特定できない。恵さんは生来やや虚弱体質だったのかも知れない。あまりに生真面目で責任感が強く、また仕事を成し遂げたいという意欲にもあふれていて、自分をいたわり、心身ともに休養する時間が少なかったのではなかろうか。家庭では眼の不自由なお父様をかかえての主婦業の負担も正司さんの助力が大きかったとしても、やはり並大抵のものではなかったろう。ときには長期休暇をとるなどして欲しかったと思ったりするが、職場の事情が許さなかったのだろう。残念なことだけど、もう取り返しはつかない。在りし日の姿を心に刻みつつ、なされたお仕事の数々を読ませていただき、参考にさせていただくことで、いつまでも良き仲間として記憶して行きたいと思う。「さようなら、清水さん！」

＊清水恵さんのお仕事については「函館日口交流史研究会」が整理し、収集された資料の保存とホームページでの紹介を準備しておられます。

《会員の仕事・近況》

◇石垣香津

・2004年12月10日、韓国のソウル歴史博物館において、「トルストイ展覧会」開幕。開会式および同展シンポジュームの会場で行なわれた贈呈式に出席した。贈呈品は、鶴田吾郎作水墨画《トルストイの肖像画とアレクサンドラ・トルスターヤの讃》の掛軸である。鎌倉市在住の所有者小熊紀子女史が、モスクワ国立トルストイ博物館館長のレミゾフ氏に贈られたもの。この掛軸については、共同研究『ロシアと日本』第5集と中村喜和・長縄光男・長與進編『異郷に生きるⅡ—来日ロシア人の足跡』（成文社 2003年）に公表したものである。同会場では、執筆者石垣が論文集と単行本を合わせてレミゾフ館長に進呈した。

◇小山内道子

・「P. ヴィノグラドフ年譜作成に向けて」『回想のヴィノグラドフ—西欧人の心に映った日本の幻想—没後30周年記念記録集』東京、ヴィノグラドフの会、2004年

◇沢田和彦

・「ブロンスワフ・ピウスツキ日本暦」『埼玉大学紀要』第40巻（第1号）、埼玉大学教養学部、2004年9月30日

・「日本で出たロシア語刊行物を求めて」『窓』第131号、2005年1月

◇中村喜和

・「ボリチェフの坂」『なろうど』49号、2004、pp. 1-10